

## 設楽町で田舎暮らしを楽しみながら、トマト栽培に取り組む ～新規参入者が地域の担い手確保に積極的に取り組む～

設楽町 水野智司  
施設トマト

【平成22年10月8日掲載】

設楽町で施設トマト栽培を行っている水野智司さんを紹介します。水野さんは、新規参入者であり、平成14年4月に就農されました。トマト栽培に真剣に取り組む姿勢が、地域の人たちに認められ、町外からの就農者としてはじめて、JA愛知東トマト部会津具支部の支部長に就任されました。今では地域にしっかりと溶け込み、後継者不足の解消のため地域の担い手確保にも積極的に取り組んでいます。

### 1 農業を始めたきっかけ

お話しを伺ったのは、水野智司さん、奥さんのいさ子さんです（写真1）。

水野さんは、もともと名古屋市で印刷関係の会社を経営されていましたが、田舎暮らしにあこがれて、56歳の時に津具村（現設楽町）に移住されました。はじめからトマト栽培をやりたくて来たわけではなかったのですが、津具村による新規就農事業をきっかけに農業に取り組み始め、すでに今年で9作目のトマト栽培を迎えています。

しかし農業が軌道に乗るまでは、順風満帆ではありませんでした。いさ子さんの話では「真冬に、ハウスを建てたのが一番きつい仕事で大変でした。田舎暮らしを楽しみに来たのに……」と笑顔で応えていただきました。

また水野さんは、就農するまで農業経験が全くなく、トマトの栽培研修等を受講する時間がないまま、トマト栽培を始めました。そのため栽培技術についてはトマト部会の先輩たちに教えてもらいながら、技術を身に付けました。

ビニルハウスを徐々に増築した結果、現在では、単棟7棟において施設トマトを

17a栽培しています（写真2, 3, 4）。また、平成18年にかん水・追肥作業の省力化を図るため養液土耕栽培システムを導入しています。



写真1 水野智司さん（右）、いさ子さん（左）



写真2 ハウスの外観

## 2 担い手の確保について

J A愛知東トマト部会（現在57名、うち津具支部22名）では、60・70歳台の会員の方が多く、水野さんが入会してから津具支部では10人も部会をやめたそうです。

これではいけないと考えた水野さんは、役員会時に支部長としてあいさつしたとき、「新規就農者の確保について真剣に取り組んでいこう。」と発言されました。

これにより、部会では新規就農者を毎年1名程度確保する目標を立て、町、農協、農業改良普及課の協力のもと、担い手確保を推進しています。

水野さん自身は、就農相談会での講師を務めたり、トマト栽培ほ場で、新規就農者候補の方達に指導助言を行い、積極的に担い手確保に取り組んでいます。

## 3 今後の展望

水野さん自身の経営規模について、夫婦2人では労力的に17aが限界で、規模拡大は厳しいのが現状だそうです。

「息子を後継者として考えるなら、現状のままのやり方では無理である。施設の大型化など新しいやり方や、もう少し楽にできる方法を考えなくてはいけない。新規就農してもやめていく人が多い。理想は、若い人にやって欲しいが、子育てをしながらでは、たいへん厳しい。定年退職予定者が、金銭的に余裕があり適している。」と語られました。

また最後に「設楽町で農業を続ける秘訣は、金もうけではなく、田舎暮らしを楽しみ、地元の人たちと仲良くつきあうこと。」と新規参入者が定着する極意を聞くことができました。



写真3 作業の様子



写真4 作業の様子

執筆：農業経営課

取材協力：新城設楽農林水産事務所農業改良普及課